

# 東日本大震災とその後の子どもたちを

## 支えている人たちインタビュー

### 第7回（前編）

#### ◎支えている人／話し手：近藤能之さん

福島県南相馬市出身。教育関係の仕事に長年携わった後、2008年に南相馬へ戻り、社会福祉法人福陽会よつば保育園副園長を務めている。現在は、南相馬市の小高地区で様々な人が集う場「小高やどりぎ」、こども食堂、ウクレレ部、絵本ライブなど、「南相馬での子育てに安心感を創る」ことテーマに、活動は多岐に渡っている。



#### 震災前から直後までのこと

福島に戻ったのは、震災が起こる3年前のことでした。当時働いていた会社の北海道の責任者をやり終えて、戻ってきましたね。それまでの生活には満足していましたし、人の会社に勤めるのももういいかなと思って。長男なのに全然親孝行をしていなかったことや、保育園をやっている親も弱ってきたということもありました。さらに、その頃にそろそろ戻ってこないかみたいなことを親が言い始めたので。そして3年後に震災があったんですね。だから戻ってきていてよかったです。震災が起こっていろいろと大変で、保育園を続けられない事態にもなりましたが、発奮材料にもなりました、山あり谷ありで。楽しいって言ったら語弊がありますが、予期せぬことが起きるっていうのは、予期せぬことをやれるチャンスでもあるので、楽しいですよ。それだけただならぬことが起きて、価値観も変わったり、生きることについての考え方も変わったりとか、じゃあこれから生きていく意味ってどんなことなのか、あるいは自分の使命ってなんなのかとか、そういうのを考えたり、考えてるばかりだと進まないの、とにかく実行することありきでやってきましたけど。前例がないから、いかようにでもやれましたね。

南相馬市は3色に色分けされて、ここに住むか住まないかは、あなたが決めてくださいっていう地域なんです。小高区は住めない地域なんですね。住んじゃだめですよって、行政に強制的に出される。でも原町区っていうのは、住んでも住まなくてもいいけれども、それは自分で決めてくださいという地域。ただ、行政は残ります。市役所、警察、消防、そういう機関は残りますっていう話なんです。でも、放射線の影響を受ける可能性があるのでこどもは住まないほうが望ましいと。これは正式に出た話です。でも、住んじゃだめだとは言わな

い。曖昧でしょ。住んでも住まなくても、あなたが決めてください。でも、子どもの親が勤めている職場は残ります。じゃあ残らざるを得ないんじゃないのっていう話じゃないですか。こどもだけどこかにやるわけいかないでしょ。そうすると、乳幼児はどうするの、保育園をなんとかやれないかっていう話になっていくわけですよね。保育園って働く親のために開けるみたいなところだから。だから幼稚園は開くのは遅かったけれども、保育園は開けなきゃいけないような雰囲気にとんどんなってきた。いや、こちらも開けてあげたいよね、でも、開けていいんだらうかって葛藤があるんですね。こどもいないほうが望ましいってアナウンスが出ているわけだから。でも、目の前でこどもがだんだんおかしくなっていく、こどもがしゃべらなくなっていく、免疫力が下がっていく、運動機能が衰えていく、太陽に当たらなくなる、家に閉じこもっている、集団生活ができない。まあそういう問題が次々と出て、うちの子このままじゃだめになるっていう声がとんどん寄せられてきて。でも、市役所からは保育園は開いちゃだめだよって言われていたんです。そういう制限がかかっていたんですね。だから私らは、この小高区と原町区の北にある鹿島区で臨時保育園を開きました。鹿島区は同じ南相馬市内でも制限がないところだったんです。普通にいいですよって。市役所の許可はもらっていないので、わかりやすく言うと、認可保育園が認可外保育園を勝手にやっていたんです。その場所も、市が管理するところはどこも貸してくれなかったの、地域が管理している公会堂みたいなところ、畳30畳くらいの部屋でやりました。5月の連休明けからスタートして、最初は20人くらいだったかな。うちの保育園と別の保育園とで話して、一緒にやろう、と。もう、うちの法人だけとかっていうんじゃないで、必要としているんだから一緒にやろうって言って。でも、給食が出せないわけ。食べ物確保できないじゃないですか。だからインターネットを通じて支援物資の要請を呼びかけたら、それを見た人が全国から届けに来てくれて、給食も出せるようになって。もう市はなんにもしてくれないんですよ。お金も出さないし口も出さないけども、当然、そういう物資の提供もない。あの時に思ったんですよ。行政っていうのは頼っちゃいけないとこだなって。だから、自分たちでやれるんだったらもうやっちゃおうって言って、とんどんやって。とんどん、とんどん、いろんな人も手伝いに来てくれて。あの時やっぱりインターネットの力はすごいなと思いました。南相馬って陸の孤島って言われたところなんです。宮城とか岩手のほうっていうのは、津波の被害でわかりやすいから、ボランティアも物資もたくさんいっているんです。南相馬は3つの地区で状況が違ってわかりづらいし、寸断されて宅急便でさえこのエリアには入れなくて。だから物資は、外の人がトラックや車で、自分で持ってきて運び入れて。しかも放射線の影響をあまり気にしない方ですね。まあそういうので、なんとかかんとかやって、原町区は9月末をもって解除になりました。なので10月1日から保育園へ戻りましたが、その時はもう、公民館に入りきれないくらい、いっぱいこどもが来ていました。避難先から戻ってきていたのです。避難先で孤立してこどもがおかしくなったりして、友達もいる、知り合いもいる、慣れているところに戻りたいって言って、戻ってきましたね。そのあたりで、どこかで保育園のスタンスっていうのも明確にしないとっていうのもあって。い

ろいろ非難する声もありましたけどね、保育園やるから戻ってくるんじゃないか、みたいなね。もちろんそうでしょう。でも、避難先で不登校になったり、家の中に閉じこもったり言葉を発しなくなったりって話を聞くと、放射線による体の影響より、それを取り巻くいろんな環境の中で、心がね、だめになってくるほうが大きいんじゃないか。じゃあそれを集団生活の中で、すこしずつ取り戻していくしかないんじゃないかっていうのがあって、うちらもやりましたよ。当然何かやるってことは、否ってという人もいるわけでね。もうそんなのいちいち気にしていたら、やれないんですから。一番いいのは気にしないことですね。もうこう決めたらぱっとやる、と。それで、喜んだりしてくれる人が何人でもいるんだったら、非難する人がいても別に、気にしなきゃいいですね。そこで、私も気にしない強い気持ちを作ることができましたね。だからなんにも気にならないですもん、いろいろ言われること。なにかやったら必ず言ってくる人っているんです、何やったって。あんなことやってた、こんなことやってたって。でもそのうちだれも言わなくなる、やり続けていけばね。だからそういう意味ではこの震災っていうのは、そういう私の心に耐性をつけてくれたというか、気にしない力を育ててくれましたかね。前の仕事で営業や訪問販売もやっていたので、だいぶ強い心は身に付けていたつもりですけど。震災っていうのは、いろんな、こうであるべきだっていう常識的なものとかを、全部取っ払って考えなきゃいけないことが多くて。目に見えないものですよ、放射線のこともそうだし、人の心だって見えないし。何が正しいのか正しくないのか。今は正しくないとしても、10年後これが正しかったと言えることになるのか。目の前のことだけではちょっと、決められないこともありました。

### 数値を下げるために

保育園再開後は、市が除染をなかなかやってくれませんでした。でも保育園開けていいよっておかしな話でしょ。さらにその時、公立の園はやりますという話で。そこでまた怒りが湧いてきてですね、怒りが人を動かす例ですね。ああもう、じゃあ私たちは私たちがやろう、とまたインターネットで呼びかけて。除染の方法って当時まだなかったから、いろんなことを試しましたよ。薬剤を撒いたら下がるんじゃないかと。でも、放射線量って数値でわかるものだから、数値を下げれば安心できるんですよ。曖昧じゃないからわかりやすい。だから、よし、保育園を除染しよう。みんなの総力を結集して除染しようって。そこで、社協にボランティアを要請したら、除染はできないですが泥かきはやってますって。なんかね、妙なよ。除染も泥かきもやること同じなのにね。結局、独自に除染のボランティアチームを作って、保育園をがっちり除染しました。絶対に下げてやる！という気持ちで。当時は、年間の被ばく線量が1ミリシーベルト以下になるようにとされていたので、1mの空間線量を0.23マイクロシーベルト/時より下げよう、0.2、切ろう！って感じでね。放射線量高いところってだいたい決まっていたので、人力でがりがり削りました。そして、保育園の線量は下がりました。そうすると保護者は、保育園は安心だね、となる。じゃあ次は、家の線量が高いから園児の家の除染やるか、と除染チームで話して。放射線量が高くて心配してい

る度合いがみんな違うから、心配で心配でたまらない人の家から順番にやろうって言って、結局 20 数軒やりました。なんせ丁寧にやらないといけないから、土日で 1 軒。やったからいいっていうもんじゃなくて、やる前この数値で、やったらこれだけ下がったよって、数値を下げないといけないから。うちのチームはおそらく、除染の民間のアマチュアチームとしては第一号で、しかもレベルがかなり高いと思います。測る人、ポイントを決める人、削る人、集める人、としっかり組織化して毎週やっていましたから。チームのメンバーはボランティアで募って、ほとんど他県から来ていました。関東圏から来ている人がほとんどだった。でも地元の保護者とかも参加していましたよ、もちろん。やってもらう精神ばかりみたいなのっていやなんです。一緒にやろうっていう気持ちで、一緒に体を動かす。だから、やってもらうだけだったらやらない、父さんも一緒にがんばる姿を家族に見せなさい、そしてここで安心感できるよね、と話していました。安心感を創るっていうのは、自分で汗水たらしてやらないと。人にやってもらったものって、どっかケチつきたくなったりするんですよ。あそこまだ高いんじゃないとか。やってもいないのに。自分たちで一生懸命、がりがり汗かいてやれば、納得いくわけ。だからそういう前向きにたたかう家族みたいなものをつくろうっていうねらいもあって。それを手伝って、という形で県外からボランティアの人たちに来てもらって、毎回終わった頃にはもう、みんな涙しちゃうんですけどね。家族も安心して涙しちゃうし、ボランティアの人たちも、やってよかった…みたいな感じになって。そうやって、こどものいる家の除染もやって、すこしずつ、子育てしていいんだなっていう雰囲気を作っていました。だからやっぱり保育園だけじゃだめで、こどもを持つ家の除染っていうのも必要で。私は旗降って、やる必要があるよって必要性を訴えて、そのために人が必要だ、手伝って、ありがとう、っていう感じですね。それでだいぶ安心できるようになったかなあという気はしますね。

## 安心できる場所づくり

一番始めにやったプロジェクトがじゃぶじゃぶ池をつくろうっていうプロジェクトです。震災後、放射線の影響があるからこどもたちは自然と触れ合っちゃいけないっていうので、管理されている公園だけでしかあそべないっていう状況が続いていました。夏になったらプールあそびや海に行って海水浴というのが普通でしたけど、震災によってそれが失われて。じゃあ水あそびってしなくていいのかっていうと、やっぱりしたほうがいい、夏だしね。それを我慢させ続けなければいけないっていうのは、こどもの成長は待ってくれないので、一年でも早く、自然と触れ合える環境を作らないといけないなと思っていましたね。

自然と触れ合うっていうのもまず管理された公園の水と触れ合うことからでした。安心をつくるには時間をかけなきゃいけないんです。いきなり野山に連れて行っても無謀だし、心配になるので。安全はけっこう早くつくれるかもしれないけど、安心はあとからついてくるんですよ。だから氷をとかすようにゆっくり時間をかけないといけないところだなって私は思っています。その当時は管理された公園にできえほとんど行っていなかったですか

ら、うちの保育園のこどもに限らず、市内のこどもたちや家族がみんな、自然と触れ合える、この場所だったら安心して外あそびできるね、水あそびできるねっていう、誰もが認知できる場所を一か所、かちっと作りたいなっていうのがありました。南相馬全体の安心感を作らないといけない、南相馬で子育てしていいんだよって。南相馬で子育てしていいのかしら、って泣いたり嘆いたりしているお母さんも当時はけっこういたので、これからみんなでそういう安心できる場所、作っていきましょうよ、と。そしたらもうここに残ったことが正解になるんじゃないのって。だから、みんなでそういう気持ちになれるようにしていこうねってことで、活動してきました。

じゃあどこの公園だったら大丈夫なんだっていうのもあって、そこは行政とも話をしました。でも、資金は私のほうで企業の補助金で集めて、公共工事ではないけれど、市が持っている土地につくって。北海道の業者に交渉して、お金を集めながら工事やってた感じですね。背水の陣で。お金集まったらやるよじゃなくて、やることは決めていました。その業者の社長も集まった分だけでやるからって言うてくれたんだけど、クラウドファンディングと補助金と使って一千万以上集まったのかな。クラウドファンディングでは、みなさんの想いとか、みなさんがここで子育てしていいんだよっていう声を集めたいなと思っていました。反響は予想上で、金額も予定した以上の金額が集まりました。これだけいろんな人が、資金もそうだし、大丈夫だよって応援してくれるんだから、ああよかったって、みんな涙していました。だから、業者の社長も自ら張り付いてやってくれて、こんなに人の想いが集まっている場所ってないよねと言っていましたね。だから、単なる水あそびをする場所じゃなくて、みんながそこで子育てできるシンボルというか、そういう場所になったのかなっていう風には思っていますね。それから間もなく、じゃぶじゃぶ池がある高見公園だったらあそんでいいよねっていう安心感ができました。ほかの公園には人いなかったですけど、高見公園だったら安心だよっていう安心感が確立されたので、私は放射線の怖さを最初に排除した場所だと思っています。それにはやはり我々だけじゃなくて、応援してくれるみなさんがいろんな声を寄せてくれたっていうのは、大きいかもしれませんね。

今はもう、ものすごいこどもたち遊んでいますよ。昨日も行ききましたけど、じゃぶじゃぶしていました。今年はコロナの影響で、市民プールとか学校のプールが夏休みにやっていないんですよ。だからみんなここにくる。ああよかったなあと思って。近隣からも来るし、車でわざわざ…当時は仙台のほうからとか福島のほうからとか来る人もいましたね。

## 支援の形

本当は、そこらへんの川で川遊びしたかったんですよ、もちろん海でも。でも、川は線量が高いんじゃないか、となる。海は津波の影響で荒れているしね。人も亡くなっているし、海水浴もできないでしょう。だったら、安心してあそべるところをつくろうっていうのが最初で。でもここ数年は、普通の川であそぶことについても、いいんじゃないのっていう親が増えてきました。やっぱり10年かかるんですよ。でも10年かけてきたからよかったの

かなとは思いますが。3年だとか5年で、はい、安心でしょ、みたいなことをすると、ちょっと乱暴なやり方だったかなとは思うので。安心って、人から言われるもんじゃないから。自分が安心だと思ったら、いればいいんじゃないのと思います。でも自分で動いたほうが安心だよって。震災でいろいろやってもらうことに慣れちゃうのもいやなんですよね。そうじゃなくて、自分も動きながらやっていったほうがいいのに、と思うんです。この間も、3月の地震で鹿島区は瓦の崩壊とか被害があって災害ボラセン立ち上がってボランティア募集していましたが、コロナの影響で市内の人だけを対象にしたらなかなか集まらなかったみたいです。市内に災害ボランティアへの意識がある人って少なくて。支援の形ってというのはなかなか難しいね。だから私もなるべく、なんでもやってあげますということはやらない。相手のために長い目でどういうふうなのがプラスになるのかなって考えながら、全てやってあげるとは言わないですね。一緒にやるんだよって。リスクを取り除くのは自分たちでやるんだよ、とかいうことですかね。そういう意識づけるのって。まあそれが自然の教材というのでしょうか。今、そういう災害がどこでもあるじゃないですか。だから、これからもそういうところに立ち向かっていける家族づくりっていうのが、私のテーマなんですけどね。強い体と強い気持ち。それは自然体験などを通じてできたらいいのかなと思っています。

後編に続く。